

好評開店中!

大阪新居酒屋行脚の最後は、大阪居酒屋、不動のアイドル「酒

女神のキクちゃん」こと原口起久代さんの店「うさぎ」だ。原口さんは心斎橋の小さな店を夜だけ借りて四年間「うさぎ」をやっていたが、子育てで五年休み、ここ内本町で三年前に再開店した。キクちゃんとはイ

太田和彦のイケイケ居酒屋

第百八十四回

大阪新居酒屋行脚の巻六

ビル一階通路に一升瓶を持ったうさぎのイラスト入り白提灯(びやくとう)がかわいい。小さな店は小カウンターと机だけ、飲み物はビールと日本酒のみ。

まあ始めはビールだな、お、キリンスタウトがある。日本の誇る黒ビールを置いてる店は少ないんだ。お通しは(豆腐・ハタハタ南蛮漬・ゴージャチャンプル)が一口ずつと飾り

気がない。白割(かっぽろ)煮着はキクちゃんのお母さん。バイト娘はニコニコ目だけ残して大きなマスクで顔が見えない。後で見てもやれ。

「キクちゃんは何？」
「今日休み、沖繩旅行にいった」
「えー……」

「そりやないだろとは言えない。玄関の貼紙(はかせ)「本日は22時閉店です」はそのためか。キクちゃん、沖繩かあ。おいらとは縁がないんだ。」

五 席カウンターの入口端は湯気が上がるお燗場で、マスク女性がお燗番だが、むしろその前に座る男客が「これもいいよ」と取り出し、さらに「そつちはもう少し」と指示している。おいらの隣のカツブルがお母さんに「次は何飲んだらいい？」と聞くと、お母さんはくだんの彼に声をかけ「次、何がいいの？」

「んーと、さつきこれだから」と自ら後ろの保冷庫にしゃがんで一本取り出し「六十度まで上げて」と渡した。一方、奥端の、かなり顔の赤いおっさんは「あれ、燗(あか)しちゃつたらんよ」と聞こえよがしに揶揄(あざわら)を飛ばすが、こちらの彼は平然と聞き流す。なんだかすごい店だ。



そ んなやりとりにお母さんはマイペースだ。娘が店を再開するにあたり「子供はまだ小さいし助けて」と懇願(こんねん)され、夜十時までならと手伝うようにしたが、生まれ育った倉敷から一歩も出たことがなく、初めての一人暮らしの大阪は目が回った。お酒は飲めないし、客商売なんてとてもともと思っていたけれど、お客さんに恵まれた。変わった人生になったのもキクのおかげ。

代替て来るバイト女子は皆かわいく、ピチピチのバイトとシワシワの私のコンビで「生んだ覚えのない娘がいつばい」と笑う。一滴も飲めなかつたのが「不思議に「風の森」だけは飲めるようになったの」ときつぱり。奈良のうまい酒だが「他はだめなんですか?」「そう、帰る時、きゅーつとコップ一杯飲むのよ」

お母さんはカラフルなポロシヤちゃんさようなら、もう会えなくてもよいです。ボクは超然とさつぱりしたお母さんのファンになりました。あたりはビジネス街で、ここは昼はランチのカレー屋、夜は「うさぎ」が使う二毛作。そのためか居酒屋らしいしつらえは何もないが、それがかえって日本酒通の客を、部活の部屋のような居心地にさせている。

さて、おいらも酒。越前大野「花垣(はながき)山麓(さんろく)の米しずく23BYだ。隣の練達(ねんたつ)自主ソムリエに敬意を表し「お燗よろしく」「ウム、45度ジャストのややぬる燗」とマスク娘に重々しく指示を出した。あの白いマスクを脱がしてやれ。「この(みそ)たくあん(て)何?」「おいしいです」と返事になっていない。よく聞こえないフリで耳に手を当て乗り出すと、マスクをはずし「たくあん(て)味噌(みそ)漬(づけ)です」。脱がし作戦成功、おお、カワイイ娘じゃないか。(この項続く)

おた・かずこ

新刊「ニッポンぶらり旅 熊本の桜納豆は下品でうまい」(集英社文庫/定価648円・税込)